

西洋建築に夢を見た

日本における近代工業は19世紀半ばより西洋技術を取り入れる形で萌芽しますが、こと建築の場合はこれら洋式の工業器械の施設として、さらには外国人技術者の生活の場として西洋建築の移入が始まります。これらの西洋建築は、当初は外国人技術者の指導の下、日本人大工により建設されますが、その後日本人大工の設計による擬洋風建築も各地に建設されます。

一方で、官立の高等工学教育機関である工学寮工学校（後の工部大学校）が明治6年開校することで、ジョサイア・コンドルにより西洋建築学の教育が始まり、卒業生が主となり全国各地に洋風建築を建設します。近代的教育が受容された後も、煉瓦、鉄骨などの量産化された材料は導入されますが、道具による手工の技術は徒弟制で伝承され、従来のギルト的職人集団が継続しており、近代的技術者（この場合は高等工学教育を受けたもの）の登場で、道具が変わることはありませんでした。

他の工学教育と比べると、建築教育の特性として、建設行為に直接関わる実習が少ないことが挙げられます。この高等工学教育での「建築学」は、欧米における「建築を設計する」学問でした。建設行為は職人（大工など）が大工道具を使い、工部大学校卒業生が建築現場で直接工事に携わることはなく、職人は従来の技術に新たな手工技術を加えることで、洋風建築を建設してゆきます。

明治20年代半ばになると建設業の創立が続き、さらに職人親方層の分解が見られるのは明治30年代末のことですが、一般的に大工道具の絶頂期は明治末から大正期と言われ、この時期まで従来の大工道具の改良が行われたといえるでしょう。つまり、西洋の大工道具を輸入しなくても、従来の日本の大工道具を改良することで、西洋建築を建てることできてしまうのです。

ここに並ぶ大工道具は、工部大学校設立に尽力した山尾庸三により教材としてもたらされたものです。これら大工道具が、当時の建築に直接影響を与えることはありませんでした。しかし、この大工道具を通して山尾は西洋建築に夢を見て、さらには近代日本の姿を見たのではないのでしょうか。

山尾庸三（天保8年（1837）～大正6年（1917））

当時開国論派であった萩藩（長州藩）では海軍術習得のためにイギリスへ留学を画策しており、名乗り出た山尾を含めた5名（長州五傑）は、文久3年（1863）5月12日、密航船に乗り5年間の海外留学に出発する。9月にロンドンに到着した山尾らはロンドン大学に修学、さらに慶応2年秋には、ロンドンからグラスゴーへ移り、ネピア造船所で見習工として働く。昼間は造船所で働き、夜はアンダーソンズ・カレッジの夜間学校に通う日々を送る。明治元年6月に日本に帰国後、工部省設立に尽力し、工部大丞の後、13年には工部卿に就任する。